

2018.8.19 #不登校は不幸じゃない in 町田

不登校体験談

嬉しかった寄り添い・辛かった寄り添い

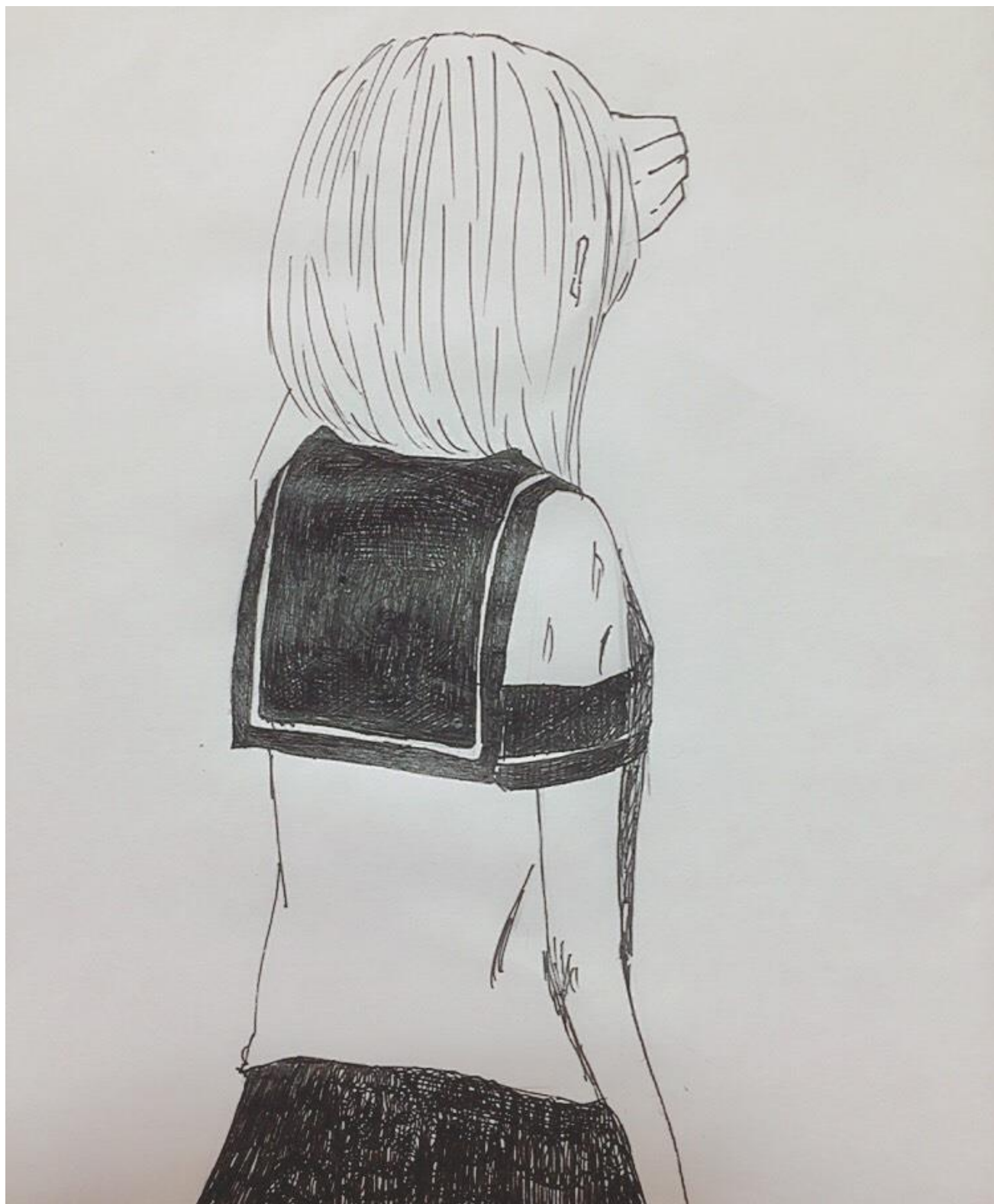


イラスト:Aika (#不登校は不幸じゃない in 町田)



町田会場タイムテーブル（予定）

- 12:50- 開場 #不登校は不幸じゃない PV 上映
- 13:00- 開会 町田会場主催者チーム挨拶
- 13:15- #不登校は不幸じゃない 発起人・小幡和輝氏からのご挨拶 live 上映
- 13:25- #不登校は不幸じゃない 発起人・小幡和輝氏の生挨拶（町田会場のみ）
- 13:30- 基調講演 演者:広田悠大（町田会場主催者代表）
- 14:00- 休憩
- 14:10- パネルディスカッション「学校に行かれないことって悪いこと？」
- 14:55- 休憩
- 15:00- 全国共通コンテンツ配信（From #不登校は不幸じゃない in 芦屋）
JERRYBEANS(元不登校バント)のステージをオン live 上映
- 15:15- 質疑応答（パネルメンバー）
- 16:00- 休憩
- 16:05- 感想の分かち合い(参加者による)
- 16:35- まとめ
- 16:45 散会
- 16:45-17:00 片づけ（お時間のある方は、お手伝いをお願い致します）

町田会場 THE 会議室町田（東京都町田市森野 1-30-8 ノアビル 7 階）

主催 寄り添いを考える会

#不登校は不幸じゃないプロジェクトチーム(広田悠大,Aika, Mizuki, 米林睦子,広田道子)他

目次

- 1 表紙 (イラスト Aika)
- 2 #不登校は不幸じゃない in 町田 タイムテーブル
- 3 目次 & #不登校は不幸じゃない in 町田 登壇者 紹介
- 4 パネルディスカッション パネリストの不登校体験談
- 8 裏表紙 (#不登校は不幸じゃない in 町田を主催する寄り添いを考える会のご紹介)
- 付 #不登校は不幸じゃない in 町田 チラシ(裏面に 主催者代表・広田悠大のプロフィール)



#不登校は不幸じゃない 発起人 小幡和輝 Kazuki Obata 氏 プロフィール



NagomiShareFund

地方創生会議 Founder/内閣府地域活性化伝道師

1994年、和歌山県生まれ。約10年間の不登校を経験。当時は1日のほとんどをゲームに費やし、トータルのプレイ時間は30000時間を超える。その後、定時制高校に入学。地域のために活動する同世代、社会人に影響を受け、高校3年で起業。様々なプロジェクトを立ち上げる。

2017年、47都道府県すべてから参加者を集めて、世界遺産の高野山で開催した「地方創生会議」がTwitterのトレンド1位を獲得。その後、クラウドファンディングと連携した1億円規模の地方創生ファンド「[NagomiShareFund](#)」を設立し、地方創生の新しい仕組みを構築中。

GlobalShapers(タボズ会議が認定する世界の若手リーダー)に選出される。和歌山大学観光学部在学中。

パネルディスカッション パネリスト紹介

氏名①年齢②出身地③不登校だった時期④現在 (※未成年者はファーストネームのみの記載)

パネリスト 広田悠大 ①23歳 ②東京都 ③中2夏から中2の終わりまで ④サラリーマン(営業職)

パネリスト Yuito ①12歳 ②東京都 ③小学校高学年から現在 ④公立中学1年生(不登校中)

パネリスト Aika ①15歳 ②東京都 ③中1の6月から中2の5月まで ④公立中学3年生

パネリスト Mizuki ①16歳 ②神奈川県 ③中1から中2 ④通信制高校2年生

パネリスト 大熊克徳 ①20歳 ②福岡県 ③中1夏から中2の終り&高校2年目 ④学生(大学1年生)

パネリスト 松島裕之 ①35歳 ②東京都→千葉県 ③小学校4年生の10月から(中学、高校も行かず)

④NPO法人職員(NPO法人フリースクール全国ネットワーク 事務局長、他)

コーディネーター 米林睦子 (社会福祉士・児童支援員)

パネリストたちの不登体験談 (嬉しかった寄り添い・辛かった寄り添い)

☆三 Yuito 公立中学1年生(不登校中)

僕は小学校六年間であったことを話します。

僕は同級生に『一緒に帰ろう』と誘った時に無視をされました。

そのことをお母さんが先生に話してくれましたが、先生は深く考えてくれませんでした。

その他にも色々なことの積み重ねで、先生も同級生も信じられなくなり4年生の夏から学校へ行けなくなりました。

そして、六年生になった時にちゃんと話を聞いて考えてくれる先生になって、途中から学校に行けるようになりました。

しかし、算数の個別の先生に『なんで休んでいたんだ』と問いつめられ、『理由を言うまで座らせないぞ』と言われ50分くらい立たされました。

それで、やっぱり先生はこんななんだと思ったら学校に行けなくなりました。

その時、お父さんやお母さんが学校に行って先生たちと話をしてくれました。

お父さんとお母さんは自分のことを好きではないと思っていたけど、このことがあって自分のことが好きだとわかって嬉しかったです。

☆三 Aika 公立中学3年生

中1の6月より、心身が衰弱し、学校に通えなくなる。

1年後、自らの意思で不登校生を積極的に受け入れている全寮制の私立中学校に転校。

しかし、転校先の中学校では女子生徒たちからのいじめに遭う。学校の先生に相談しても、「乗り越える」の一点張り。「乗り越えたい」と思っている、どのように乗り越えて良いのかわからず、9ヶ月で私立中学校を退学。学区外の公立中学校に転校し、そのままを受け入れて下さる先生と出会い、現在は登校中。

(寄り添いを考える会が聞き取り、まとめました)

☆三 Mizuki 通信制高校2年生

中1のとき、いじめを受ける。中1の担任は学校を休むようになって、何のアクションもしてくれなかった。いじめを解決することができず、不登校になる。中2~3の時の担任は、時々、電話を下さるなど気にかけてくれたため、嬉しかった。しかし、勇気を出して学校に行っても、「見ているだけで大丈夫よ」と腫れ物に触るようなお客様扱いで、学校に居場所はなかった。それでも、中3のときは、週1~3日の五月雨登校を続ける。通信制高校の通学コース1期生(高校はそれ以前に開校)として高校に進学。現在は、初バイトにも励みながら、高校生生活を送っている。

(寄り添いを考える会が聞き取り、まとめました)

☆三 大熊 克徳(かつのり) 大学1年生

1998年福岡市で生まれる。市内の私立中高一貫校に進学するも、いじめや学業不振をきっかけにうつ病を発症、以降不登校になる。病院での治療を受け、適応指導教室、情緒学級を経て県内の定時制単位制高校に入学。高校卒業後は上京し、都内の大学に通っている。

私について

私が不登校になったのは、主に中学1年から2年にかけてのことでした。当時のクラスは、授業中など少し騒がしく、荒れていたように思います。クラスを取りまとめられないどころか、注意をするたびにクラスメイトとの仲が悪くなり、当時の自分としては苛立っていました。元々、入学当初から少し仲が悪いクラスメイトがいたので、特に彼らからいじめられていました。いじめからのストレス、学級委員を続けていくプレッシャーなどが、学業不振を引き起こし、それがストレスになっていました。2学期の初めごろから学校にほとんど行けなくなり、最初は休むことを許していた両親とも、言い争いが増えました。

朝、目覚めても体を起こすことができなくなり、うつ病と診断され入院しました。治療をする中で、段々と回復していき、適応指導教室等にも通えるようになり、集団生活になじんでいきました。

中学3年の前に、私立中学を中退し、家の近くの公立中学校の中にある特別支援学級(情緒学級)に通いました。自分の進路を見つめなおし、県内の定時制・単位制高校に進学しました。高校には4年間在学しましたが、卒業して現在は都内の大学に通っています。

☆三 松島 裕之 NPO法人職員(NPO法人フリースクール全国ネットワーク 事務局長、他)

——不登校のきっかけは？

「明日から学校に行きません」と親に宣言したのは、小学5年生のゴールデンウィーク明けでした。

それまでは、毎朝どうにか起きてみるけど、お腹が痛くて学校に行けない。だから今日は学校を休むと親に言う。そんな問答を来る日も来る日もくり返していてクタクタでした。

ですから、ゴールデンウィーク中はすごく楽しかった。長野にある祖父の家で遊んでいたのですが、私が不登校しているなんてことは誰も知りません。周囲の視線が気にならないということは、本当に気楽でした。

ですが、終わりが近づくとつれ、徐々に暗い気持ちになるわけです。「また学校に行かなきゃ」ではなく、「また学校に行けないんだらうな」って、明日から悩まなければいけない。おなかが痛いといって学校を休む私をみて両親も悩んでいましたから、「この先ずっと学校に行かないなんて言ったら家族はどうなってしまうんだらう」という怖さもありました。とはいえ、家族をおもんばかって、学校に行く努力を続けるのはもう限界でした。

——「不登校宣言」の背景にはどのような理由があったのでしょうか？

これといった明確なきっかけはなかったです。いくつかのことが積み重なったことだと思います。

一番大きかったのは、先生。まったく尊敬できなかったんです。勉強ができる優等生の質問や意見にはちゃ

んと答えるのに、そうでない子どもが同じような質問や意見を言うと「黙ってなさい」と一喝する。このちがいが当たり前のようにある空間ってなんだろうって。当時は「将来のために学校に行かなきゃ」とがんばっていたけれど、「将来のため」というのは漠然としていて具体的なイメージがなかなか持てませんでした。

しだいに、「学校に行けない理由」ではなく「学校に行く理由」がなくなってしまったこと、私のなかではそれが大きかった。それから3年～4年ほど、ひきこもっていました。

——ひきこもっていた当時、どんなことを考えながらすごしていましたか？

明確におぼえているのは、15～16歳のころです。高校生年齢になって、「あと数年で自分も働かなくちゃいけないんだ」っていつも考えていました。

私の父はサラリーマン。満員電車で揺られ、毎日同じところに通う父の姿を見て、「私にそんなことができるわけがない、死にたい」って思っていました。いま思えば、なぜ「できるわけがない」と「死にたい」をつなげて考えていたのか不思議ですが、当時は本当にそう思っていました。父同様、「私も22歳になったらサラリーマンになるものだ」と思い込んでましたから、一日一日と、日が経つのがすごく怖かったのを覚えています。

——16歳だと、アルバイトができる年齢ですね。

不安と焦りから追い立てられるように、「バイトしなきゃ」と思い、新聞の折り込みチラシ片手に電話をかけ続けました。でも、なかなか雇ってもらえない。募集要項に「18歳以上」と書いてあるところも多かったんです。

そのうち、電話を掛けることもつらくなってきて、父に「やる気はあるけれど、年齢がネックになってバイトがなかなか見つからない。18歳まで猶予をください」って言いました。すると父は、「18歳だとか猶予だとか、そういうことにこだわらなくていい。俺の子どもである以上、この家に住むために何かする必要はない」と。それで不安が100%払拭できたわけではありませんが、「どんな状態でも、うちの子であることに変わりはない」という父の言葉に救われた気がしたのはたしかです。

外に出るようになったのはゲームにもマンガにも飽きた17歳のとき。車の免許を取ろうと決めました。自由になる行動範囲を広げたかったからですが、免許を取るにも車を買うにもお金がかかる。それならばと思い、コンビニのアルバイトを始めました。新しくできる店ということもあり、週2日、1日3時間の勤務から始めました。

余談ですが、初めてバイトをするとき、個人的にはオープニングスタッフがおススメだと思います。まわりも初バイトという人がいるし、人間関係がすでにできあがっている輪の中に単身乗り込むわけではないので、気楽に始められますから。

——バイトを始めて、家族との関係に変化はあったのでしょうか？

太宰治の本って、どれを読んでも大した感想を持たないんだけど、『人間失格』の「恥の多い人生でした」という一節だけは当時、すごく共感できました。

というのも、家族のなかで一番年下、かわいい存在としてふるまわなければいけないことに、疑問を感じるようになっていたからです。

苦しい時期もすぎて「一人の人間として自立したい」と考えているのに、「無理して働かなくていい」とか

「ずっと家に居ていい」という親の優しさに、若干の居心地の悪さを感じるようになりました。「どんな状態でも、お前はうちの子だ」という言葉に救われた時期はたしかにあったけど、もうそういう時期じゃない、と。生意気に映るかもしれませんが「一人前の人間として扱ってほしい」という思いがあったのだと思います。そんなとき、バイト先のコンビニのオーナーから「正社員にならないか」と誘われました。

4年間地道に働いてきたうえでの評価としてうれしかったのですが、最終的には断ってしまいました。

——ふつうに考えたら、もったいない話では？

葛藤もありました。「少々待遇が悪くても、学歴のない自分が正社員になれるチャンスなんてそんなに多くはないかも」って。

でも、そういうふうに考え始めると、仕事のことを考えるのがすごく苦しくなりました。「学歴がないと働けない」。今まで意識していなかったそういうネガティブな気持ちに気づいてしまったんです。

「少ないチャンスをモノにしなければ」という動機だけでこれから数十年働き続ける。それは待遇うんぬんの話ではなく、働く姿勢そのものが自分を苦しめることになるかと直感で感じました。それじゃ自分は幸せになれるだろうって。

10歳で不登校をして以来、私の人生は「学校に行かなかったことをいかに肯定できるか」がテーマだったように思います。私は今でも「不登校は自分にとってプラスだった」と考えています。ならば、自分の不登校体験を軸に据えた仕事をする、それが自分の気持ちを裏切らずに生きる道なのではないかと思うようになりました。ちょうどそのとき、千葉で「ネモネット」を立ち上げる話があり、その立ち上げに関わりながら、いくつかの不登校に関係のないバイトを掛け持ちしつつ、不登校に関する仕事を選び、働いてきました。

——不登校をして20年、ご自身の「不登校その後」についてどう考えていますか？

不登校をしたこと自体は悪いことと思っていなくても、「学歴がないと働けない」と考えてしまう不登校経験者って、当時の私だけじゃないと思います。不登校関連の職に就きたいと思う一方、そうした社会状況を変えたいという思いもずっと持っていました。「不登校したら〇〇しか仕事がない」というのはおかしいだろうと。不登校関連の仕事を中心に食べていけるようになってからは、自分が楽になりたいというより、世の中を変えたいという思いのほうが強くなりました。

その後は、「ネモネット」やフリースクール「東京シューレ」のスタッフを経て、現在は「フリースクール全国ネットワーク」の事務局長をしています。加盟している64のフリースクールの中間支援組織としての難しさもありますが、夢の半分は叶ったかなと。

NPOで働くというのは、給与の面などで、決して待遇がいいとは言えません。だけど、働く姿勢で自分が苦しむなんてことはありませんし、言いたいことは言い合える職場です。

「世の中を変える」というスタート地点にも立てたと思うので、これからは自分の夢のもう半分以上を叶えていく。それが自分の生き方であり、不登校にかかわる仕事でお金をもらう私の責任でもあると考えています。

——ありがとうございました。(聞き手・小熊広宣)

子ども・若者の「命」と「心」を守るために…



一人でいいから自分に寄り添ってくれる人がいたら、
乗り越えられるかもしれない。
叫べる人はまだいい。
叫べない人が、小さな声でいいから声を出せば、
寄り添ってくれる人がいれば、
いてくれるだけで人生が変わるかもしれない。

「1人の大人が君のそばにいるよ」

寄り添いを考える会は、子ども若者たちの命と心を守るために、

困難な状況に置かれている子ども若者たちに寄り添える大人を増やすための活動を行っています。

寄り添いを考える会 <https://yorisoi-machida.jimdo.com/> ✉ yorisoi.machida@gmail.com

「#不登校は不幸じゃない」は、全国 100ヶ所で同日開催されますが、各会場は各会場主催者の自主財源によって開催されることになっています。町田会場では、☝コーヒー1杯分の寄り添い☝をコンセプトにした寄り添いを考える会が行っている「寄り添い募金」にいただいたお志を財源に充てさせていただいています。

♥ コーヒー1杯分の寄り添い ♥ 寄り添い募金のお願ひ

コー ヒ 1杯分 (1 □ 500 円)のご寄付で困難な状況にある子ども・若者への寄り添いをお願い致します

お志は

不登校・引きこもりの子ども若者に寄り添う活動、いじめ防止啓発等、

子ども・若者たちの命と心を守るための活動に使わせて頂きます。

寄り添い募金の詳細は <https://yorisoi-machida.jimdo.com/寄り添い募金/> をご覧ください

#不登校は不幸じゃない in 町田 不登校体験談集

2018年8月19日発行

非売品

編集 寄り添いを考える会 ✉ yorisoi.machida@gmail.com

※本小冊子の無断使用・無断転載はお断りいたします